



第1号  
平成22年  
10月20日発行

## 島根半島四十二浦巡り

### 再発見研究会について

会長 上野 良亮

奈良時代の出雲國風土記（七三三）に、「八束水臣津野命は、出雲は余りにも小さく作られているので、海の彼方のあちこちから余った国を引つ張つてこられた。」と書かれています。

その引つ張つて来た国が、島根半島です。半島の津々浦々を巡ると四十二浦があつて、それぞれの「なさ」の汐で不浄な体を清め、その浦々の神社を拝するという信仰習俗があります。

四十二浦を巡り終えれば一畑薬師にお参りし、身の健康を薬師如来様におすがりするという、まさに神仏混淆こんぶこうの習俗であつたといえます。

歩けば一週間近くかかり、浦々の集落の人々は食べ物や宿を提供し、当時（主に江戸時代）は、訪れる人々に宿を奉る客神という扱い方がありました。

特に、目の悪い方は、この四十二浦巡りに熱心で、巡る最後には浦々の汐を一畑薬師にお納めしたようです。

私どもが「四十二浦再発見研究会」を立ち上げたのは、医療不毛の古い時代にあつて、このように根強い信仰習俗を、今の目で確かめたいという思いからであります。

どうかご関心のある方は、ぜひ研究会に参加していただきたいと考えております。

題字／飯塚大幸一畑薬師管長

写真／「鷺港」  
板垣 宏 撮影  
(出雲市大社町在住)

鷺浦は四十二浦を巡る浦の一つであり、西方に位置する鷺港は古くから寄港する北前船で賑わった。明治25（1892）年には、大阪商船が日本海沿岸航路を開始し、大正11（1922）年まで続いた。港から、下駄履きのまま大阪まで出かけることができたのである。

中央白い建物の右後方に「伊奈西波岐神社」がある。（鷺浦地区については3ページ参照）



鷺浦集落のトンネル手前墓地より撮影



共立女子学園  
島根県古代文化センター客員研究員  
関 和彦

### 四十二浦に「彷徨」う

島根半島には「彷徨」が似合う。島根半島北岸の浦々、その一つ方結浜（現・片江）に、遙か昔、学生の頃、『出雲国風土記』の調査で訪れたことがあった。それは歴史を辿る「彷徨」の旅となった。わたしの風土記研究はその時、その場所での「彷徨」から始まり、今につながる。

浜の北側、砂浜近くの民宿に身を寄せ、翌朝目にした「方結浜」はわたしに真の歴史との出会いを導いてくれたのである。

古代の方結郷、そこには少なくとも千人の人びとが暮らしていた。しかし、わたしの目の前の片江（方結）の世界には古代の民に配られたはずの水田はなかった。その古代の民は漁撈の民であり、いわゆる班田収授法は入る余地はなかったのである。その出雲国島根郡方結郷は古代の人々の生活をはじめて具体的に、そして実態的に示した場所となった。

その片江の海辺での「彷徨」は「歴史の神」との出会いそのものであった。まさに神の国、出雲である。今も時折、出雲の旅はその「歴史の神」との出会いを叶える。

海辺といえは思い出す。……釣り針を失くした山幸彦は海辺を「さ・迷い」、そして塩椎神に会い救われる。

海辺、そこは「さ・迷う」場所である。「さまよい」は「迷い」と異なり、神との出会いを求める行為である。「さ」は早乙女・五月・早蕨などにつく接頭語である。

島根半島、多くの浦々、そこに鎮座する神々。かつて多くの人々が四十二浦を巡り、汐汲み、そして神社を参拝し、神々との出会いを遂げたのであろう。それ

はあの山幸彦の海辺での「彷徨」行為につながるのかもしれない。

現代、情報が溢れ、「迷う」われわれ、四十二浦巡りは、「浦」に「彷徨い」、身を移すことにより、日頃見失っている心の「裏」を「映」す旅になりそうである。四十二浦、その浦々に一人ひとり、似合う神との出会いが生まれる。



大学共同利用機関法人総合地球環境学研究所  
大谷 めぐみ

### 会の発足によせて

「半島の宗教史を考えてみなさい。島根半島には特徴的な歴史や文化があるのではないですか。」——日本史を学んだ大学生時代、指導教官にそう言われてはっとしたことを思い出す。

島根県の歴史や文化に関心を持ちつつも、島根半島のことは十分に知らなかった。「半島」とはいえ、宍道湖を挟んで東西に長く以南地域と陸続きである島根半島。半島の歴史や文化の特徴とは何だろうか、その風土の成り立ちを調べたいと考えた。

島根半島には、沿岸の四十二の浦を巡る習俗がある。各浦で潮を少しずつ汲みながら、あるいは神社などを参拝しながら、二週間をかけて巡る。そして、浦で汲んだ潮などを一畑薬師（一畑寺）へ納める場合もあることを知った。調べるほどに興味を引かれる一方で、疑問も膨らむばかりだった。

日本や世界のいたるところに、遍路、巡礼、巡拝といわれるような「巡り」は数多くあるが、海岸線を巡り歩き、潮を汲んで、神や仏に納めることにはどのような意味があるのか。また、それはいかなる歴史をたどり、半島という地形、景観とどのように関わるものか。

以降、島根半島の社寺を中心に、出雲の宗教史や民

俗について研究し、その奥深さに模索を続ける日々を送っている。

このたび、島根半島四十二浦巡り再発見研究会が発足し、幸いにもこの会に参加させていただけるのは大きな喜びである。

当会は、地元の方々による地域に根ざした情報収集の成果と、学問的分析の成果、さらには会員及び諸機関のサポートが融合して活動を進めていく。四十二浦巡りを素材として、島根半島の各地における古く、新しい姿を「再発見」することを目的としている。

まさに、現在にまで続く半島の歴史と文化を見つめる作業となるだろう。

たくさんの方と多くの事柄を共有し、生き活きとした半島の姿を捉えていきたい。

(研究会副座長)

**島根半島 四十二浦巡り再発見講演会**  
……四十二浦巡りを考える……

日時/平成22年 **11月28日(日)**  
午後2時～4時30分

会場/島根県立古代出雲歴史博物館 講義室  
出雲市大社町竹葉99-1 TEL.0853-53-8600

島根半島に古来伝わる「四十二浦巡り」と呼ばれる海岸(浦)の神社を巡り歩く信仰習慣があります。しかし、この四十二浦巡りはいつ、何のために始まったのかは不明です。島根半島巡礼の終点は、一畑薬師とされています。

**講演**

1 演題 「島根半島の古代世界」  
講師 関 和彦氏  
(共立女子学園 島根県古代文化センター客員研究員)

2 演題 「四十二浦巡りの魅力」  
講師 大谷 めぐみ氏  
(大学共同利用機関法人総合地球環境学研究所客員研究員)



出雲市大社町 伊弉諾神社



## 鷺浦について

大社町鷺浦

藤井健蔵

### 一、鷺浦のはじまり

一説によると、古代さぎ浦は「佐木浦」と言われていた。(註 神社創立由来記では佐岐浦) 往時、佐木某という人が上司の命を受けて、この地一帯の主となり、永年住みついたと伝えられている。

その頃の「さぎ浦」の海岸線は現在の梅谷道入口付近まで入り込み、住みついた人たちはこれより南、杵築谷と梅谷の川沿いに住居を構え、その後、幾世代を経て後、稲背(いなせ)胚命(いなせのたま)を主神として祀った氏神「伊奈西波岐神社」は、梅谷入口で大々山山麓に建立された。

其の後、何たびか襲った洪水と山崩れのため、杵築谷、梅谷から流出した土礫は永年の間に下流に堆積して、現在の海岸線を形成したものであるといわれている。

氏神境内が現在地に遷されたのはそれから幾世代後のことと思われる。又、或寅年(年代不詳)に大床山一帯は一山が変貌するほどの山崩れが起こり、土礫は山麓一円に堆積して現在の川西一帯の高台を形成し、尚、同時に起きた稀有の大洪水のため、それまで西山山麓に流れていた現在の八千代川は遙か東に押し出されたため、神社の砂岩の大鳥居は崩壊流出して水没したと伝えられていたが、昭和二十七年、現在の東導流堤工事の際、鳥居の一部が露見したことで往時の天災をはっきり証拠立てられている。

その際、鳥居の一部は業者の手で慎重に引揚げられ、それ以来、神社境内にひどく風化されたまま存置されている。現在、真野から穴窯一帯及び川西台地付近の随所に露見している硬い粗粒玄武岩は、この天災地異の物凄さを如実に物語っている。

(鷺浦七十三番地 故杉谷磯松翁口伝)

### 二、氏神 伊奈西波岐神社と長谷川家

▽伊奈西波岐神社

社号 大穴持伊奈西波岐神社

祭神 稲背胚命

合祭神 八千矛神

白兔神

創立年代は、前記出雲風土記、延喜式の両書に載せていることから、風土記以前に創建せられたる社と推考される。出雲国造千家に伝わる本社縁起には、「鷺大明神の社、大社より四十余町鷺浦にあり」とされている。

出雲大社の祭神大国主神に随従の神にして、浅からざる縁故ある神で出雲大社鎮座地より程遠からぬ鷺浦地に往昔社殿を営み祭祀せしものである。

明治五年二月、村社に列せられ、同七年十月十七日、教部省より出雲大社の攝社に定められ、其の後、大正十一年十二月、社格昇進願出により慎重に御詮議になり、大正十二年三月県社に昇格、それより昭和二十年までは毎年十月八日に、県知事又はその代理者の参向の上、撰幣コウ料奉上盛大に祭祀をとり行われていたという。

▽長谷川家の家柄

長谷川家の先祖は遠く神代に遡り、大和国長谷郷にあつて永年大和朝廷に仕えていた家柄で、代々要職にあり、戦国時代は、織田氏に出仕された記録がある。

その後、いまより凡そ五百年前、文禄元年、官太夫幸光の代に官を退き、鷺浦に移住し以来現在の八十九代長谷川高清宮司に至るまで、伊奈西波岐神社の祭祀や社殿、境内の維持管理は当家伝来の所轄となつてい

### 三、鷺浦の寺院、説教所

▽天竜山文殊院

所在地 大社町鷺浦三十八番地

開山の沿革は、不老山神光寺第十六世久嚴春昌大和尚により開山した。慶安元年(西紀一六四八)以来、住職は神光寺より派遣された。昭和十七年三月独立して其の後宗教法人となる。山門には線刻仁王像を安置し、庭内に悉曇文字(梵字)供養塔があることは、不老山神光寺が往時坊床山にあつた当時、天台宗であつたことと符合している。

本尊 釈迦牟尼佛  
宗派 曹洞宗(総持寺系)

▽鷺浦説教所

西本願寺派真宗説教所として、真宗・浄土宗年中行事の場として明治二十六年創建されたものである。

### 四、鷺銅山

鷺銅山は、古代ロマンを髣髴させる古い銅山であつたと言われている。

石見銀山は今や世界遺産となったが、その先駆けとなったのが、この銅山であつたことも特筆事項である。博多の商人神屋寿貞が博多と鷺浦を船でしょっちゅう往来していた。途次、石見で銀山を発見すると、鷺銅山主である三島清右衛門に開発を要請した。三島は、鉱員三人を連れて石見銀山に入ったのは一五二六年(室町時代)であつたと「銀山旧記」に書かれている。

### 五、私の思い

この地区は、無産業化・人口流出等で超少子高齢化の進展で高齢化率六十パーセントを超え、限界集落状態となつており、このままでは消滅集落となることが懸念されている。

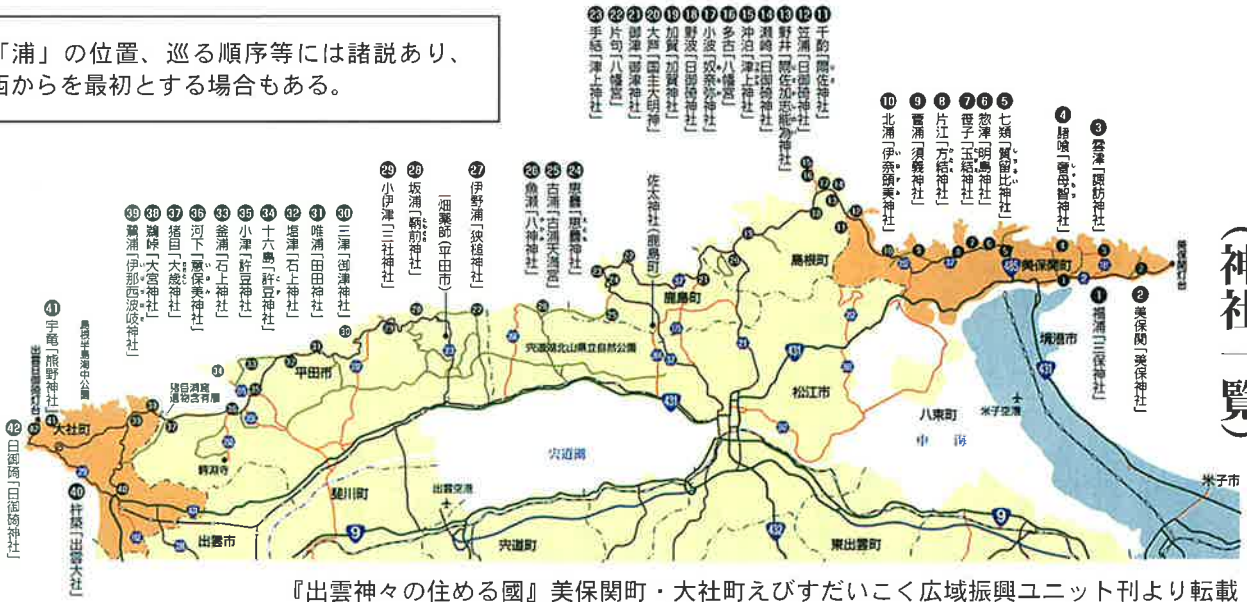
そこで四年前より有志で「鷺元気な会」を立ち上げ、その歯止めをかける活動を開始した。

なんとか新しい芽が出つつあり、大いに希望を持って活動する所存である。

(前鷺鷺コミュニティセンター所長)

# 島根半島四十二浦 (神社一覽)

「浦」の位置、巡る順序等には諸説あり、西からを最初とする場合もある。



『出雲神々の住める國』美保関町・大社町えびすだいきく広域振興ユニット刊より転載

## 研究会設立経緯

平成二十一年七月二十四日、島根県立図書館（松江市内中原町）において開催された、エッセイスト原美代子氏の挿絵原画展「一畑沿線ものがたり」はらみよこの世界」に併せ、「古代出雲の旅」等の著作を發表されている島根県古代文化センター客員研究員関和彦氏の「一畑薬師への旅—四十二浦の浦々—」と題した特別講演会が同館集会所で行われた。

原画展と講演会が契機となり、同年八月二十六日、「四十二浦巡り」の現代的価値と意味を再発見し、その復活と地域の発展を願い、研究会設立検討会を開催した。さらに数次の検討会をもち、「四十二浦巡り」の終点とされている「一畑薬師を事務所として、平成二十二年三月十四日、「島根半島四十二浦巡り再発見研究会」が設立された。

## 研究会役員

会長	上野良亮	出雲市大社町
副会長	飯塚大幸	出雲市小境町
副会長	原美代子	出雲市西代町
監事	常松士郎	出雲市美野町
監事	板垣和彦	出雲市大社町
副座長	関谷めぐみ	八王子市元八王子町
副座長	大谷義己	京都市山科区
副座長	古浦育夫	松江市上乃木
事務局長	木幡育夫	松江市西持田町

## 賛助会員募集

研究会では、県内外に発信する「四十二浦」をめぐる島根半島の情報を取りまとめるため、地元につながる神社に関する伝説、行事、地域の催事など過去から現在に至る状況について詳しい方、神社宮司、コミュニティセンター、公民館、郷土史家、教育関係の方々など、活動に参加頂く賛助会員を募集します。

賛助会員には、研究会の活動に関心を持ち、活動を応援して頂ける方(団体)の加入もお願い致します。

賛助会員には、研究会、講演会へのご出席、広報誌の送付、ホームページの掲載記事の投稿等の研究会事業のご案内を致します。

賛助会員の申し込みは、研究会会員(役員)にご相談の上、賛助会員入会申込書を事務局に提出頂き、年会費三千元をご負担頂きます。

【お問い合わせ先】

担当者 木幡育夫(事務局)

TEL 〇九〇-四五七二-〇六四一

FAX 〇八五二二-二一九九四二

## 編集後記

念願であった「四十二浦研究会」が産声をあげました。発端は、『一畑沿線ものがたり』(平成二十年七月刊)を出版された原美代子氏(出雲市)の提唱と、関和彦先生のご講演「一畑薬師への旅—四十二浦の浦々」が呼応したことでした。多くの皆さんに支えられた四十二浦への新しい旅立ちが今ここに始まります。

創刊の本号には、関和彦、大谷めぐみ両先生に古代出雲、四十二浦への思いを込めて書いていただき、鷺浦の藤井健蔵氏は四十二浦の歴史を紐解く端緒として価値ある事柄を語ってくださいました。

今後、年に二回、研究成果や情報を広報「島根半島四十二浦巡り」でお届けします。賛助会員にも数多く参加していただき、資料などが寄せられることを願っています。

神々が住むという出雲の国で発足した研究会の今後は、古き良き文化を残そうとする情熱に支えられた皆さんによって成果を積み上げることが出来ます。ささやかな出発ですが、多くの方のお力添えが必要です。ご支援をお願いします。

なお、「神話のふるさと「島根」推進協議会」のご支援を得ることが出来ましたことに感謝いたします。

(古浦義己)

## 島根半島四十二浦巡り再発見研究会広報

第一号

発行 平成二十二年十月二十日

発行者 島根半島四十二浦巡り再発見研究会

〒691-0005 出雲市小境町八〇三 一畑寺内

ホームページ『島根半島四十二浦巡り』 <http://42ura.jp/>